中日本版

各地の話題

新潟 糸魚川市

ナシの新品種「新碧」産地化へ

地場産ヒスイと絡めてPR

【新潟】糸魚川市で新潟県オリジナル品種の日本ナシ「新碧（しんみどり）」＝写真＝の産地化に向けた取り組みが始まっている。

新碧は大玉で糖度が高く、酸味が少ない緑がかった「青なし」。その色合いが同市で産出される「ヒスイ」を連想させる。産地化に向けて、2023年に新碧の試験栽培が開始され、25年7月に上越地域なし産地協議会が設立された。その年9月には同協議会が同市の久保田郁夫市長に市内で収穫された新碧を贈呈し、試食した久保田市長も太鼓判を押した。

同市は、新碧の開発に携わった新潟食料農業大学松本辰也教授の講演会を開催したり、2026年度予算で価格高騰が懸念される農業用資材購入を支援する補助制度を創設したりして生産者の拡大を後押しする。

同市では、すでに「越（こし）の丸茄子」がブランド化されており、これに続く特産品にしようと本格出荷が始まる28年に向け、ヒスイと絡めて知名度の向上を図っている。（糸魚川市農業委員会）

女性農委らリース作り

地域の特色を体験で学ぶ

山ブドウのつるでリース作りを体験

長野県農委会女性協上伊那支部 **交流研修**

【長野】県農業委員会女性協議会上伊那支部（上伊那管内8市町村）は、このほど宮田村で研修会を開き、会員の女性農業委員らが同村特産ワイン「紫輝」の原料である山ブドウのつるを活用したリース作りを体験した。講師に同村の「梅が里ギャラリー手づくり屋」から3人の講師を招き、手づくり屋の取り組みや活動内容を聞き、山ブドウのつるを使ったグリーンリース作りに取り組んだ。山ブドウの品種は「ヤマソービニオン」で、せん定で切ったつるをリースの土台として成形する。専用機を使い、乾燥した松ぼっくりを接着材でリースの土台に着け、つるとの間に針葉樹の「ブルーアイス」や「ネズ」を差し込み飾りつけ、完成させた。

研修会は、開催地の特色ある取り組みを学ぶため同協議会支部の総会と併せて毎年開かれる。今回、女性委員はリース作りをしながら会話し、市町村をこえて交流した。（上伊那農業委員会協議会）

農地・担い手対策の連携強化

事務所をワンフロアへ

京都府農業会議

【京都】府農業会議は、農地対策と担い手対策を一体的に推進するため、京都府庁西別館の2階と3階に分かれていた執務室を2階に統合してワンフロア化し、事務局体制を強化した＝写真。

2026年度から府農業会議は、農地対策部と担い手対策部の2部体制となる。農地対策部は、農政総務課、農地利用最適化推進課、農地集積推進課の3課、担い手対策部は、担い手育成課と移住促進課の2課で業務を行う。農地対策と担い手対策の連携を強化し、外部から担い手の誘致を望む地域と、地域外に進出を希望する農業法人などを仲介する広域農地利用調整の仕組みを整えて、市町村域をこえた農地貸借のマッチングなどを推進する。農地中間管理事業は農地集積推進課、経営相談や雇用就農資金は担い手育成課が担当する。

農林漁業就業へ支援サイト

スタートガイド「あいちから」開設

愛知県

【愛知】県は農林漁業への就業を支援するため、就業前に必要な情報をまるごと集めたプラットホーム「あいち農林漁業スタートガイド あいちから」（＝二次元コード参照＝）を2月17日に開設した。サイトでは、就業に向けた情報をテーマごとにまとめており、県内各地での就業セミナー、体験会、農業塾の情報、先輩就業者の体験談などの動画やインタビュー記事、県内の市町村が公開する貸し出し・売買意向の農地情報が掲載されている。

サイトにある「かんたん農業経営シミュレーション」では、品目や人数を直感的に選択するだけで就農後の収入などのイメージをつかむことができる。県は2026年度からの5年間で1千人の就農者を確保したい考えで、「あいちから」を出発点として、今後も市町村や関係機関と連携し、オンラインでのセミナー、就農相談など機能を広げ、就業希望者への支援を充実させるとしている。

未来の選択、ここから

あいちから

あいち農林漁業スタートガイド

「あいちから」のロゴマーク

石川県農委会女性協

女性農委ら〝稼げる農業像〟学ぶ

男性委員にも参加呼び掛け研修会

女性農業委員らを前に講演する宮治氏

【石川】県農業委員会女性協議会は3月12日、農業委員らの資質向上を目的に金沢市内で研修会を開催。女性委員のほか男性委員にも呼び掛け、25人の委員が㈱みやじ豚（神奈川県）代表取締役社長宮治勇輔氏の「選ばれる農家になるためのブランド戦略」と題した講演を聞いた。宮治氏は「かっこよくて・感動があって・稼げる農業に」という農業の今後のあり方を提示。味や品質といった「物の価値」に加え、生産者の情熱や体験を物語として伝える「付加価値」の重要性を語った。「地域でオンリーワンの存在となることが農業経営に必要」と話し、参加者の共感を呼んだ。参加した委員からは、後継者不足や、経営に関する多くの質問があり、「時間があっという間に過ぎた」「ほかの男性委員にも聞いてほしい」などの感想が寄せられた。

全稲会議創立50周年の意義かみしめる

兵庫県稲経会議が総会と研究会 新会長選任も

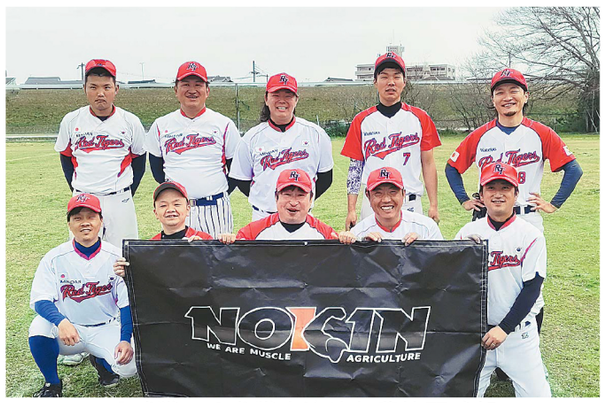
全稲会議50周年に向けて、想いを語る榎本さん

【兵庫】県稲作経営者会議と、その事務局を担う公益社団法人ひょうご農林機構は2月9日、神戸市で稲経会議の総会と研究会を開き、会員らが所属する全国稲作経営者会議が創立50周年を迎える意義をかみしめた。稲経会議の高本知宜（もとのぶ）会長のあいさつに続き、農水省近畿農政局兵庫県拠点の阿部健治地方参事官と県農林水産部の宮島康彦次長が来賓のあいさつを述べた。研究会では㈱グリーンフィールド・エノサン代表取締役の榎本浩規（ひろき）さんが「稲作経営者会議の歴史とこれから」と題して記念講演。榎本さんは愛知県稲作経営者会議の前会長で、今年12月に開かれる「全国稲作経営者会議創立50周年式典」の実行委員長を務める。講演では、自らが取り組んだ愛知県内での「売れる米づくり」や、50周年に向けての抱負が語られた。その後、総会で新会長に就任した田渕真也さんや榎本さんも交えたパネルディスカッションが行われ、参加した会員は、50周年を迎える意義をかみしめながら、組織の発展を誓い合った。

和歌山・日高「農筋」

若手農家が野球チーム

「農業をもっと楽しく自由に」



公式戦への参戦を決めた農筋野球部

【和歌山】農業をもっと楽しく自由に、そして農家がスターとして輝ける社会をつくりたい、との想いから活動する若手農家チーム「農筋（のうきん）」。その発起人である日高町の上田明広さん（42）と日高川町の森幹也さん（42）を中心に「農筋野球部」を結成。今春、クラウドファンディングへの挑戦や公式戦に参戦した。上田さんと森さんは高校の同級生。高校時代に深い交流はなかったが、互いに親元就農した後から接点が増え、意気投合。農業界への疑問や課題に対して一石を投じたいとの想いからインターネットのポッドキャストで「農筋ラジオ」を開始。番組ゲストとして招いた農家仲間とともに、それぞれの趣味や経験を活かした活動を展開する。上田さんは「農業に対するマイナスのイメージを変えたい。若者が憧れる職業として農業を志し、次の世代につながっていく社会をつくっていきたい」と熱く語る。